

座間市

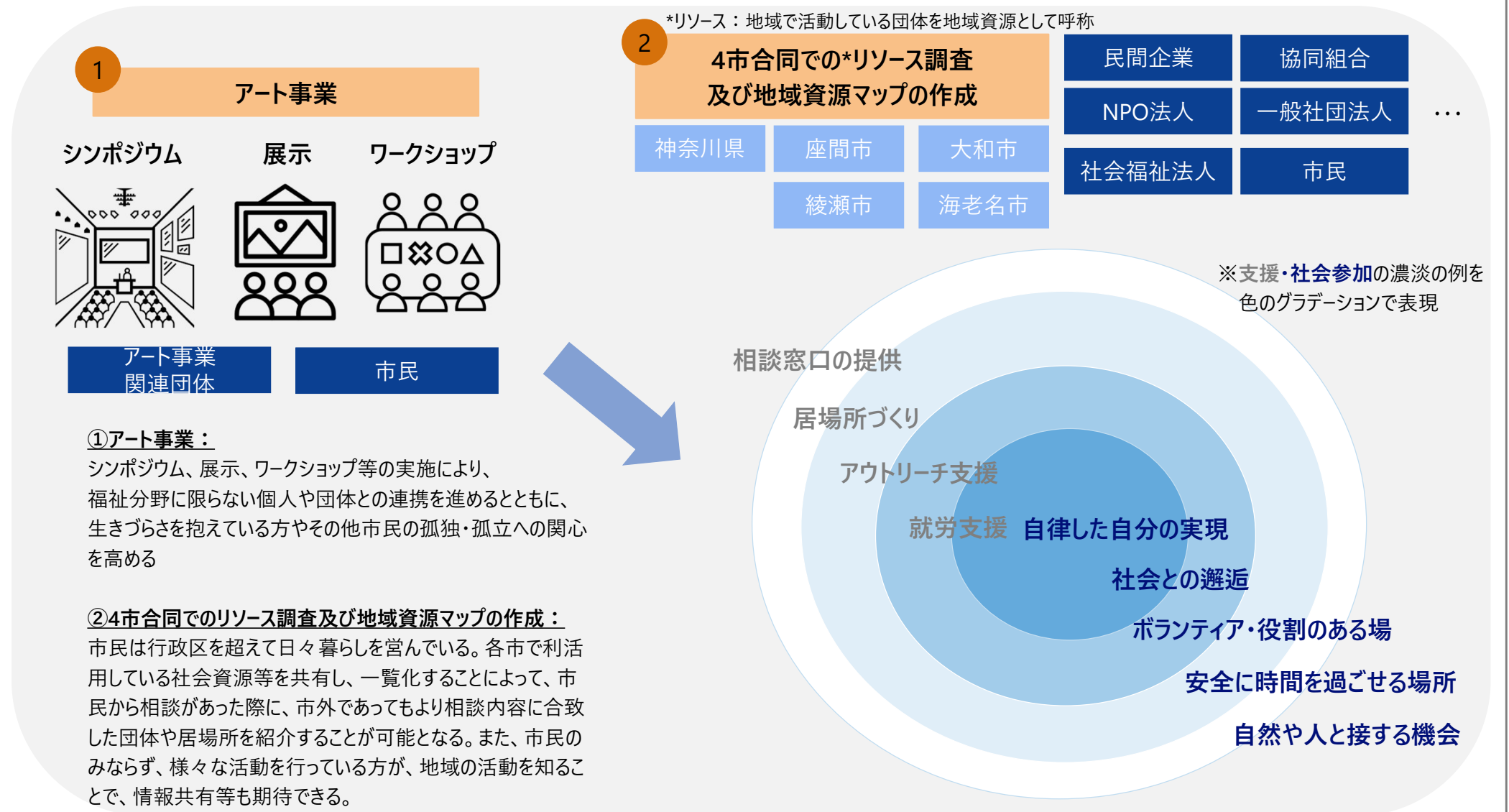


【A. 取り組みの全体像】

1.自治体の概要						
	自治体名		座間市、綾瀬市、大和市、海老名市	担当部局名	座間市地域福祉課、綾瀬市福祉総務課 大和市健康福祉総務課、海老名市生活支援課	人口 約60万人
	自治体内連携	市内連携部局（メイン）	各市支援体制により異なる。 ※座間市の例 地域福祉課	市内連携部局（メンバー）	各市支援体制により異なる。 ※座間市の例 市内29課（「包括的支援体制推進委員会」）	
		市内連携内容	各市支援体制により異なる。 ※座間市の例 「包括的支援体制推進委員会」 座間市政策会議規程（に基づき、個別の政策課題等に対応するために設置		市内連携内容	各市支援体制により異なる。 ※座間市の例 「包括的支援体制推進委員会ワーキンググループ」 包括的支援体制推進委員会の下に設置。全ての市民が生きること、希望を持ち、市民が抱える複合的で多様な課題を連携して解決するため、包括的な相談支援体制構築を図る上で具体的な検討を行う
2.形成をめざす地方版連携PFの姿						
従前の取り組み ※重層の取り組み、外部組織連携、地域コミュニティ形成等	- 生活困窮を柱に包括的な相談支援体制の構築を目指し、福祉領域でのステークホルダーを開拓、委託先や庁外支援団体などで構成される「支援調整会議」を月1回実施し、支援団体との連携、検討を継続して実施している（座間市） - コロナ禍における市民団体等との協働によるフードパントリー事業、就労準備支援事業「はたらっく・あやせ」と協働の拠点型のひきこもりサポート事業、相談窓口を訪れることが困難な方を対象としたアウトリーチ支援事業（綾瀬市） - こもりびと支援窓口の設置による、当事者や家族の相談支援、社会福祉協議会と連携した社会参加機会の創出（大和市） - アウトリーチ支援専門員のアウトソーシングと委託先による連携機関の開拓、包括連携協定を結ぶ企業とのひきこもり等支援に係る事業連携についての打診（海老名市）		実現したい状態 ※構築する仕組み／支援対象の住民を取り巻く環境	今年度のゴール	- 広域的に連携できる社会資源等の発掘及びリスト作成 - 孤独・孤立支援に対する市民への意識付け - 担当者レベルの連携会議結成	
				最終的なゴール	市域にとらわれない事業者との連携強化、地域全体での相談・支援体制の構築及び活用（地域資源マップの作成含む）	
3.地方版連携PFの外部連携体制				4.PF連携による価値や工夫_考え方		
地方版連携PF 立ち上げ年度 未	参画メンバー	4市がこれまでの取組の中でつながっている団体 + α		- 昨年度、座間市の試行的事業を2つ実施した。「アートによる社会参加の創出」では、これまで福祉や孤独・孤立に関心のなかった住民に対して、孤独・孤立問題やその対策に興味をもってもらった等の点でアートの力を活用することに効果を感じた。 「啓発のための学習会」では、地域で活動する団体は行政単位（市域）で活動しているわけではないことが知見として得られた。 - 日々の暮らしを起点に考えれば、生活者（民側）は市域の枠を常に意識して暮らしているわけではないので、孤独・孤立対策の視点からは生活圏を意識した取組も必要であると考えているが、行政（官側）は自団体以外の民間団体について情報すら持っていないことが多い。本事業により4市の連携強化と広域の官民連携PF形成を図ることで、より生活者の暮らしの有り様に合わせた支援が可能となる。 - 広く孤独・孤立問題を周知することで、民間団体、地域住民等も社会参加のきっかけや伴走者になりうることを啓発し、「地域全体での相談支援体制」の構築を目指す。		
	選出・打診時の工夫	※今回のPF形成で候補団体に出会う可能性				
地域協議会 立ち上げ年度 未	参画メンバー	各市支援体制により異なる。				
	選出・打診時の工夫	※今回のPF形成で候補団体に出会う可能性				

【B.連携PFイメージ】

5. 連携PFのイメージ図



【C.試行的事業】_一覧

6. 本年度に取り組む試行的事業の概要

試行的事業の ポイント・工夫

- アートを軸とした4市協働での普及啓発活動・当事者を対象としたWSの開催
- 4市で活用できる地域資源マップの作成及び共有

事業名称	事業内容	目的／期待効果・KPI	実施時期	発注先（予算）
1 アート事業	孤独・孤立という社会課題を一般大衆に広く啓蒙することを目的とした街中展示（海老名市）、市役所という市民生活を意識する場所で、孤独・孤立の問題を個人として考える機会をつくるための美術展（座間市）、当事者を参加対象として、アートの力で自分の存在を肯定できる時間をつくるWS（綾瀬市）、行政・福祉・アートの各領域における孤独・孤立への知見を共有し、市民参加を促すシンポジウム（大和市）を開催した。	- 孤独・孤立を感じている方が自分の生きづらさを肯定的に捉えられるようになる。 - 孤独・孤立を感じている方に対して寛容な環境をつくる。 - 就労による自己実現だけでなく、生きづらさを抱える人の中にある個性や魅力が発見・評価される地域づくり。	✓ 令和6年11月～ 令和7年3月	株式会社Little Barrel (770万円)
2 リソース調査・ 地域資源 マップの作成	【調査対象及び調査対象者数】 4市内で活動するNPO法人、社会福祉法人、子ども食堂、地域包括支援センター等157件（メール・郵送・手渡し・FAX等）に配布、63件回収 【調査事項】 - 活動内容、人とのつながりや孤独・孤立に関連する取組の有無、PFへの参画意向、団体紹介等 【調査方法】 - まず4市へ聞き取り（保有するリストや社会資源の確認）を行い、孤独・孤立対策（就労や居場所等）となりえる民間団体のリスト化を実施 - アンケートは、メール・郵送・手渡し・FAX等でリスト内の団体へ配布	4市内の孤独・孤立PFに関連する取組を実施する団体の把握、官民連携PFに参画意向のある団体等の発掘 - 調査先からの更なるつながり先の紹介により把握していない社会資源の発掘	✓ 令和6年12月～ 令和7年2月	一般社団法人 市民連帯経済 つながるかながわ (29.9万円)

7. 次年度以降に向けた事業等の案

※PDCAサイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ（あれば）を例挙

- ・4市連携による「地域でつながる官民の支援体制」の構築・持続的な活動基盤の形成
- ・就労による自己実現だけでなく、生きづらさの中にある魅力を発見・評価できる体制の整備
- ・地域住民が市域にとらわれず支援につながる環境の整備

8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響

- ・表現者と支援される/する人が立場を超え、ユニークな時間と場を共創した本プロジェクト。高齢化や単身世帯増加が進むいま、どんな人も孤独や孤立の問題と無縁ではない。それを先駆ける、先進性と示唆に満ちた企画だった。（地域創造レター 3月25日号より抜粋）
- ・孤独孤立に対して、寄り添うこと、待つこと、などの重要性を体感できる企画だった。不確かさを含む時間的、心理的な余裕が必要だと感じられた。（関係者コメント）

【C.試行的事業】_1.アート事業（ワークショップ）

概要 工夫点	- 各自治体の孤独・孤立に関する支援につながっている方を対象に、3組のアーティストによるWS（WS①キュンチョメ「みんなで貝を食べる 食べた貝で、目を閉じる」、WS②飯川雄大「0人もしくは、一人以上の観客に向けて」、WS③金川晋吾「写真と日記のワークショップ」を行った。 - 各WSの目的を鑑み参加者像を明確にしたうえで、各自治体で支援員と相談しながら、参加者に声掛けを行った。	ねらい - WS①自然の物（貝）や自然現象（貝が開く）、自然に対する想像（目を閉じる）を通じて、『自然とのコミュニケーション』を体感してもらう。 - WS②街中にささやかな「影響」を加えることから、環境を含む他者と関係することの楽しさ（「関わることは悪いことではない」ということ）を体感してもらう。 結果 - WS①：参加者23名(うち相談者17名) - WS②：1日目21名(うち相談者9名)、2日目20名(うち相談者8名) - WS③：第1回16名(うち相談者6名)、第2～3回11名(うち相談者5名)
------------------------------------	--	--

WS①キュンチョメ 「みんなで貝を食べる 食べた貝で、目を閉じる」

- 日時：令和6年12月26日 14:00-16:00
- 会場：綾瀬市保健福祉プラザ調理室
- 参加者とともに貝を調理し、食べ、貝殻に水平線を描き、貝を目の上に乗せ、目を閉じ深呼吸を行った。「貝が開く」様子から、「心を開く」楽しさや心地よさを無意識で体感してもらうことができた。
- 水平線が描かれた貝殻は、座間市役所の展覧会場にも展示された。

（支援者からの感想）

・参加者の一歩引いた緊張感から、貝の焼ける匂いに惹かれた時の、獲物をしとめた時の集中力のある視線など、普段は見えない光景が見えた。さらに、こうした活動の中で、協力思考で動ける人だけではなく、協力を避ける人の動きも垣間見えた。

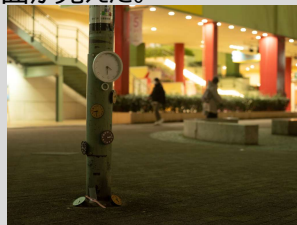


WS②飯川雄大 「0人もしくは、1人以上の観客に向けて」

- 日時：令和7年2月18日、19日 13:00-16:00
- 会場：ビナSUNホール（神奈川県海老名市中央1-4-1 ビナウォーク3番館）
- 参加者は「バレそうでバレない、でも気がついたら目が離せなくなるようなイタズラ」をテーマに、参加者が設置場所や材料、作り方から自由に発想し作品を作り、ビナウォークと海老名中央公園に仕掛ける。仕掛けた作品を展示物としてマップを作成し、来場者に気づいてもらう。

（支援者からの感想）

・すぐに作業に取り掛かる方、熟考する方と様々で無事終了するのかと1日目は心配していたが、2日目は参加者・支援者の枠を感じることなく一つの空間で作品を作っている一体感が生まれていた。普段は見えない気持ちや感覚が表現され本人たちの新たな一面が見えた。



WS③金川晋吾「写真と日記のワークショップ」

- 日時（全3回）：
 - ✓ 令和6年12月17日 14:00-17:00
 - ✓ 令和7年1月8日 14:00-17:00
 - ✓ 令和7年1月27日 14:00-17:00
- 会場：綾瀬市保健福祉プラザ
- 参加者に継続して日記を書いてもらう試みや、写真撮影を行った。写真家や支援者を被写体に、相談者が撮影した写真や、日記などが座間市役所の展覧会場で展示された。

（支援者からの感想）

参加者が立場関係なく日記を共有することで、WSの回数が進むにつれて写真を撮る距離感が変わる人や、変わらない人などそれぞれに変化があり、一人ひとりの人との距離の取り方などが作品に表れていた。



【C.試行的事業】_1.アート事業（展示）

概要

工夫点

- 海老名市、座間市の2か所で展示を行った。海老名市では、海老名中央公園・ビナウォークにて、WS参加者の作品を展示した。座間市では、市役所にて、WSから生まれた参加者の表現やその記録を中心に展示を行い、展示期間中の週末にはギャラリーツアーやトークイベントを行った。
- トークイベントにて、出展作家とキュレーター、主催市の企画担当が、企画の背景やプロセス、支援とアートが交わる可能性について紹介することで、一見関わりのないように見える支援とアートの関係性について来場者にも理解を促した。

ねらい

結果

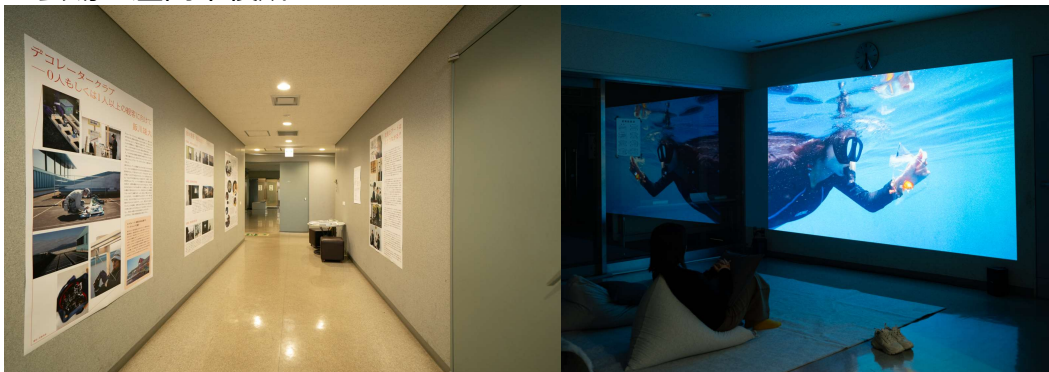
- 海老名市では、孤独・孤立という社会課題を一般大衆に広く啓蒙することを目的として、街中展示（市公共施設と隣接する民間商業施設）を行った。座間市では、市役所という市民生活を意識する場所で、孤独・孤立の問題を個人として考える機会をつくるための美術展を開催した。
- 来場者合計：3,198名（海老名会場：2,345名/1日平均293名、座間会場：853名/1日平均85.3名）

展示の様子

- 海老名会場
会期：令和7年2月21日（金）
～28日（金）9:00-17:00
会場：海老名中央公園
・ビナウォーク



- 座間会場
会期：令和7年2月21日（金）
～3月2日（日）9:00-17:00
会場：座間市役所



アンケート結果（自由記述抜粋）

（海老名会場）

- 会場では地図パンフレットを持って、展示を探している方に何人もすれ違った。特にお互い言葉をかわしたり、交流があったわけではないが、同好の士という感じを持ち、孤独・孤立対策の文脈に「ぴったり」はまっていた。
- 目が離せなくなるようなイタズラで、楽しさと日常に紛れている小さな違和感におもしろさを感じた。

（座間会場）

- 展示から、生きているだけで他者に影響を与えている可能性が十分にあることや、人を頼ることについての謙虚さとポジティブさを感じた。
- 市役所という、ふだん事務的なことでしか訪れないような場所にしながら、時間も距離も超えたどこかに意識を飛ばせるはじめての体験だった。
- 「寄り添う」という言葉と現実のギャップの難しさ、立場の取り方など、戸惑うことばかりだけど時間や力をかけて変わっていくことはあるんだなと思った。アートの力で越境できたところが大きいにあったと思う。みなさんの葛藤に触れて、励まされるわけでもなく、自分の孤独孤立や、つながることのむずかしさ、つながりの大切さを認識できた。
- 昨今溢れる地域おこしのための芸術祭とは異なり、座間市に存在した特徴的な福祉の存在から始まり、地続きの流れから職員の方を通して美術につながるこの価値が、とてつもなく貴重で、美術の世界にとって大事な要素だと感じている。

【C.試行的事業】_1.アート事業（シンポジウム）

概要

- 行政、福祉、アート各領域における孤独・孤立という課題への知見を共有し、市民参加につなげることを目的としたシンポジウムを開催した。

工夫点

- 第1部で孤独・孤立とアートの力をテーマに議論し、第2部で広域/多職種連携の必要性について議論した。
- 会場とのインタラクションを挟むことで、参加者の孤独・孤立という社会課題への普及・啓発を行った。

ねらい

- 行政、福祉、アート各領域における孤独・孤立という課題への知見を共有し、連携に向けて議論すること。

結果

- 参加者126名
- 「孤独・孤立支援にアートにできることがあると感じましたか」の設問に、9割程度が「すごく感じた」「感じた」と回答。

シンポジウム「孤独・孤立にアートができること」概要

- 日時：2月21日（金） 第一部：13:00-14:30、第二部：15:00-17:00
開場12:30、入場自由（先着順）、UDトークによる文字支援あり

- 会場：大和市保健福祉センター（大和市鶴間1-31-7）

プログラム：

◆第一部「孤独・孤立とアートの力」

●登壇者：

大西 連（内閣府孤独・孤立対策推進室参与、認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやい理事長）、鈴木 康広（現代美術作家、令和5年度同プロジェクト参加アーティスト）、西原 珉（秋田市文化創造館長、東京藝術大学美術学部准教授、心理療法士）

◆第二部「孤独・孤立支援における広域／多職種連携の必要性」

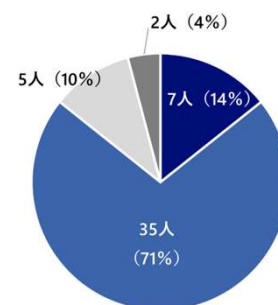
●登壇者：

奥田知志（NPO法人抱樸理事長）、田中みゆき（キュレーター、プロデューサー）、室井舞花（一般社団法人ひきこもりUX会議理事）

●ファシリテーター：大西 連

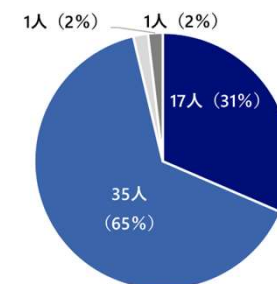
アンケート結果・当日の様子

第一部の講演会で、孤独・孤立支援にアートにできることがあると感じましたか？（N=49）



■すごくできた ■できた ■できなかった ■まったくできなかった

第二部の講演会で、孤立・孤独支援に多職種連携が必要であると感じましたか？（N=54）



■強く感じた ■感じた ■わからない ■感じなかった



【C.試行的事業】_2.リソース調査・地域資源マップの作成

概要

- 大和、海老名、座間、綾瀬の4市における孤独・孤立を支援する団体の存在と活動状況を把握し、4市で共有できる地域資源マップを作成する。
- 4市内で活動するNPO法人、社会福祉法人、こども食堂、地域包括支援センター等157件（メール・郵送・手渡し・FAX等）に配布、63件回収。

工夫点

- 各市から回答対象者を募集すると共に、調査実施会社の自主調査によって回答対象者を選出し、幅広い活動内容の団体を集めることができた。
- 調査結果を支援に活かせるよう、Googleマップのマイマップを用いて、地域資源マップを作成した。

ねらい

- 市民から相談があった際、市域を超えて適切な居場所や支援団体へのつなぎを行うべく、広域内で活動する団体の活動内容やPFにおける連携可能性について明らかにすること。

結果

- 内容別に見ると、「家庭」に関する活動を行っている団体、形態別にみると、「就労支援」を行っている団体が多かった。
- 調査対象団体をプロットした地域資源マップを作成した。

アンケート結果抜粋

- 回答者の活動内容をカテゴリ別に集計し、サンバースト図を作成したところ、ひとり親、子育て、虐待、DV、ひきこもり、身寄りがいない人、ヤングケアラー等の「家庭」に関する活動を行っている団体が最も多いことがわかった。
- 活動形態としては、就労支援が最も多く、次いで生活サポート、居場所づくりという結果であった。

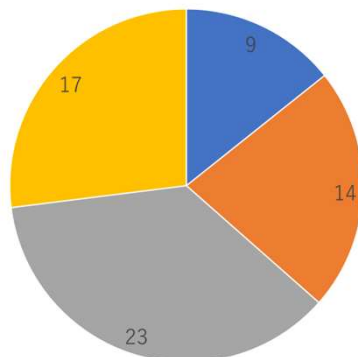
地域資源マップ

- Googleマップのマイマップを用いて、調査対象団体の位置関係と活動概要を可視化することで、今後の支援に活用しやすいアウトプットを心掛けた。

▼回答者の活動内容分布
(サンバースト図)

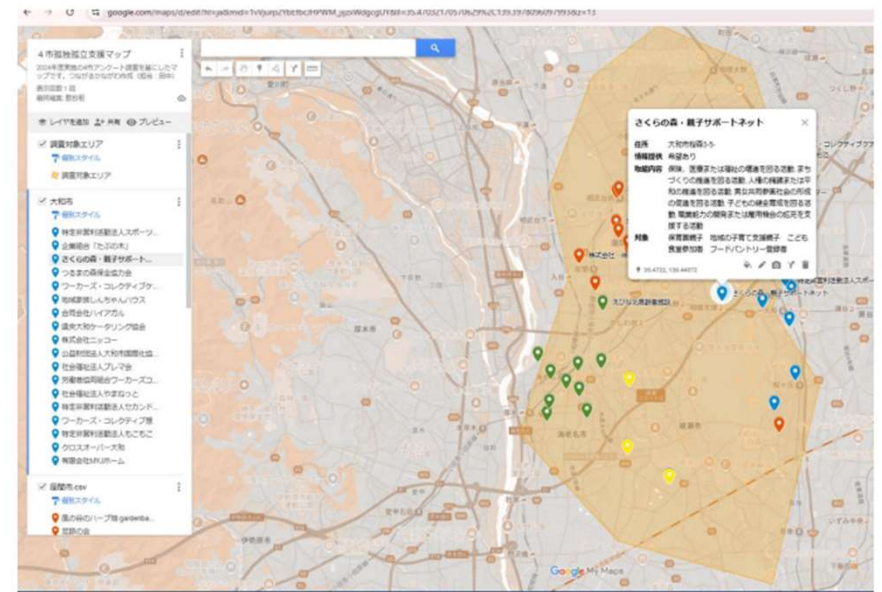


▼回答者の活動形態



N=63
(単位: 団体)

- アウトリーチ
- 居場所
- 就労支援
- 生活サポート



https://www.google.com/maps/d/edit?mid=1vVjup2YbEfbcJHPWM_jijzxWdgcgUY&usp=sharing



【D.PF構築プロセスにおける留意点】



【E.ブレイクスルー要因】現在抱えている課題や、これから目指そうとしている方向性の 共通項の発見・共有

令和6年8月～

令和6年10月

令和6年11月以降

取り組み課題

- 4市での、アート事業及び広域連携に向けた意思決定の難しさ（本質的な方向性は4市で概ね一致しているものの、意思決定の際は、各市のニーズ、思いなどが異なるため、すり合わせに時間を要した）

その後の変化

- 同じ目的・方向性を掲げつつ、**担当イベントを役割分担することによって、各市が主体的に動くことができた**
- その後企画・実施したリソース調査に関しても、**共通項である課題を解決しようと4市協力して進めることができた**
- 市同士で個別に情報交換や課題解決に向けた方向性を探る取り組みを行った（公共職業安定所を巻き込んだ他管轄者の利用検討、市域に限らないひきこもり・居場所の提供事業の活用、各市の事業の他市在住者の参加等）

アクション／ブレイクスルー要因

- キュレーターとの話し合いを重ね、昨年度の座間市による経験も踏まえてアート事業で何を行うかが明確になり、**各市で担当するイベントを決めたこと**
- 各市が抱えている課題について話し合うことで、「市域を超えて活動している団体について把握が難しい」等の**共通項を見つけることができたこと**